

B年特定14 ヨハネ6章37―51節

〔直訳〕

37 「すべて 父が私に与える者は 私のもとに 来ているだろう、
そして 来る者を 私のもとに 決して私は追い出さない 外へ、
38 というのは 私は降って来た 天から ない 私が行くため 私の意思を
そうではなく 意思を 私を遣わした方の。

39 だがこれは ある 意思で 私を遣わした方の、
ようにと すべて 彼が私に与えた者を 私が失わない その者から、
そうではなく 私が復活させる その者を 終わりの日の「中で」。
40 なぜならこれは ある 意思で 私の父の、
ようにと すべて 見る者は 子を そして 信じる者は 彼を 持つ 永遠の命を、
そして 復活させる 彼を 私が 終わりの日の「中で」。

41 そこで つぶやいていた ユダヤ人たちは 彼について
というのは 彼が言った、
「私は ある パンで、 天から降って来たもので」。

42 そして 彼らは言っていた、
「ないか この人は イエスで、 ヨセフの息子で、
その者の 私たちは 知っている 父と母を
どうして 今 彼は言う 次のことを
『天から 私は降って来た』』

43 答えた イエスは そして 言った 彼らに、
「つぶやくな 互いと共に。」

44 誰もできない 来ることが 私のもとに
もし 私を遣わした父が 引き寄せないなら 彼を。
そして私は 復活させるだろう 彼を 終わりの日の中で。
45 ある 書かれて 預言者たちの中で、
『そして あるだろう すべての者は 神に教えられて。』
すべての 父から聞いて学んだ者は 来る 私のもとに。

46 次のことでない、 父を 見た 誰かが 神からある者以外の、
この者が 見た 父を。

47 まことに まことに 私は言う あなたたちに、

信じている者は 持つている 永遠の命を。

48 私は ある 命のパンで。

49 あなたたちの父たちは 食べた 荒野の中で マンナを

そして 死んだ。

50 これは ある パンで 天から降って来るもので、

ようにと 誰かが それから 食べる

そして 死なない。

51 私は ある 生きているパンで、 天から降って来たもので。

もし 誰かが 食べるなら このパンから

彼は生きるだろう 永遠に、

そして だがパンは、 ところの 私が 与えるだろう

私の肉で ある 世の命のために。」

〔新共同訳〕

37 父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのどころに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。38 わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。39 わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。40 わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

41 ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのこととつぶやき始め、42 こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか。」43 イエスは答えて言われた。「つぶやき合うのはやめなさい。44 わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。45 預言者の書に、『彼らは皆、神によって教えられる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る。46 父を見た者は一人もない。神のもとから来た者だけが父を見たのである。47 はっきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている。48 わたしは命のパンである。49 あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んでしまった。50 しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。51 わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

①文脈

① ヨハネ福音書6章は、イエスこそ命のパンそのものであるという主題を取り上げている。五千人に食べ物を与える出来事も、そのことを指し示すしである。この出来事をきっかけとして25節以下の対話が始まるが、対話が進むにつれて群衆とイエスの間の溝は深まっていく。群衆はいつかイエスに敵対する「ユダヤ人」（41節。ヨハネ福音書では、ユダヤ人は民族名でなく、イエスに敵対する者を表す語として使われることがある）となつてつぶやき、イエスの発言について激論が生じ（52節）、その結果、弟子たちの多くが離れ去ることになる（66節）。

② 6章37―40節は、群衆が「ユダヤ人」に変身する直前のイエスの言葉である。41節以下では、群衆はパンを食べても、イエスの言葉が理解できずにつぶやく。彼らは「私たち」の思いから抜け出せずに、殻に閉じこもり、イエスのもとには来ることができない者となる。

②構成

③ 37―40節
イエスのもとに来る者は「父が私に与える者」である。37節の「父が私に与える」は44節では「父が引き寄せる」と表現されている。イエスは父である神の意思を行うために降つて来た。神の意思を述べる39節と40節は同じ内容であるが、対応する語によって深められている。

④ 41―42節
イエスは「私は天から降つて来たパンである」と述べていたのだが、ユダヤ人がイエスの言葉を42節で引用するときには、「パン」が抜け、「天から私は降つて来た」となっている。ユダヤ人につぶやかせた原因は、イエスが「パン」であるかどうかにはなく、「天から降つて来た」ということにある。だから、彼らはイエスの素姓を熟知していることを強調する。

⑤ 43―51節
43節からイエスの答えが始まるが、この答えは二つの部分（43―46節と47―51節）に分けられる。その理由は後半部に使われる言葉（「命」「食べる」「死ぬ」「生きる」）が前半部では一度も使われないが、これはテーマの変化のしるしだからである。

⑥ 前半部（43―46節）では、43節で「つぶやくな」と述べ、「私のもとに来る」で囲い込まれた44―45節の後に、完了形の動詞を使って「この者（＝神からある者）が父を見た」と結論づけている。

⑦ 後半部（47―51節）では、47―48節と51節は「私は…パンである」と「永遠の」によって、49節と50節は「食べる」と「死ぬ」によって対応しており、キアスムス（交差配列法）を作り上げている。キアスムスを用いることによって、人の死を超えるいのち（永遠のいのち）がどこから来るのか、その源泉が強調される。

③イエスの父の意思（37―40節）

⑧ 37節では、イエスのもとに来る人は、「父が私に与える者」だとされている。神が先に働くので、人はイエスのもとに行くことができる。人が自らイエスのもとに行くというよりは、神に引き寄せられてイエスのもとに行く（44節）。そして、イエスはそのような人を「決して」追い出すことがない。なぜなら、イエスはその人のために神の意思を実現する使命を負っているからである。神はイエスにとって「私の父」であり、「私を遣わした方」だと言われているが、このような表現にすでにイエスは神から大事な使命を託されていることがほのめかされている。神はイエスを

通して実現したい思いがあるので、イエスを「遣わした」のであり、イエスは「私の父」である神の指示に従い、「天から降って来た」のである。

① 38節からは、父なる神とイエスとが一つになって実現しようとしている「意思（セレーマ）」が明らかにされる。イエスが「天から降って来た」のは、自分の「意思」を行うためではなく、父の「意思（御心）」を行うためである。イエスは自分のセレーマを捨ててからっぽになり、神のセレーマの実現のために働く。神の願いは従順な御子イエスを通して実現する。

② その神の「意思」が39節と40節に述べられているが、この二つの節は内容的にはまったく同じだと言える。そこで対応語を確認すると、次のようになる。

39節	40節
a 私を遣わした方の意思	私の父の意思
b 私に与えた者	子を見て信じる者
c すべて（誰も）失わない	すべて永遠の命を持つ
d 終わりの日に復活させる	私が終わりの日に復活させる

神は「私を遣わした方」であり、「私の父」である（a）。イエスのもどに來る人々は「（神が）私に与えた者」であり、「子を見て信じる者」である（b）。この対応関係から分かるように、イエスを信じるということが可能になるためには、それに先立って、神が働く必要がある。神の介入なしには信じることは不可能である。cでは、神がイエスに託した人々に対してイエスが行うことが述べられている。イエスは彼らを「誰も失わない」、全員が「永遠の命を持つ」ようにと手を尽くす。dはほぼ同じ表現であるが、40節では人称代名詞「私」が加えられ、強調されている。イエスは現在だけでなく、未来においても私たちの命のために配慮する。

④ ユダヤ人のつばやく（41―42節）

① ヨハネ福音書での「ユダヤ人」は、イエスに敵意を持つエルサレムの人々を指すが、ここでは、40節以前で「群衆」と呼ばれており、しかもイエスの父母を知っているガリラヤの人々のことである。ガリラヤの群衆がつばやく始めたとき、イエスに敵意を持つ「ユダヤ人」へと変身する。② 彼らがつばやくのは、イエスが「天から降って来た」と述べたからである。彼の両親を「私たちは知っており、「この人はイエスではないか」と考える彼らには、イエスがなぜ「天から降って来た」と口にするのか、理解できない。聖書の中では「つばやく」という語は、自分の予想や期待を裏切られた者の不服や不満を表す言葉である。自分の思いに閉じ籠る群衆はイエスを目の前に見ていながら、イエスのもどに行くことのできない者となる。

③ 42節では「私たちは」が強調されているが、この「私たち」はイエスを自分たちと同じレベルに引きずり降ろす「私たち」であり、自分の考え方から抜け出せずにいる「私たち」である。だから、この「私たち」は「どうして、今、『天から私は降って来た』と彼は言うのか」とつばやくことになる。群衆がイエスの父や母を知っていると主張すればするほど、イエスがどこから来たのか、その真相が分からなくなる。

⑤ 「つばやくな」（43―46節）

① そこでイエスは、まず「つばやくな」と語りかける。続く44―45節は「私のもどに來る」で囲い込まれている。しかし、「私のもどに來る」ことができるのは、父が人を「引き寄せる」とき

であり（エレ三―3）、父から「聞いて学んだ」ときである。だから、つぶやき続けるかぎり、「私たち」という殻からは抜け出せない。

④44節と45節の「私のもとに来る」の間には、未来形の動詞が二つ挟まれている。

「私のもとに来る」	現在
「私（イエス）は復活させるだろう」	未来
「神に教えられてあるだろう」	未来
「私のもとに来る」	現在

「私のもとに来る」という現在は、イエスと神が活発に働く未来を開くが、その未来が逆に現在の取るべき態度を教える。この円環的な動きに巻き込まれることは、「私たち」という殻から抜け出し、信仰という道に足を入れることである。この動きに巻き込むのは父であり、「神からある者」イエスである。父を見たのはこの「神からある者」ひとりである（46節）。

⑥「生きているパン」（47―51節）

④47―51節のテーマは「パン」であり、キアスムスの形をとっている。aでは「信じている者」、すなわち43―46節に描かれた円環的な動きに招き込まれた者は「永遠の命を持っている」が、それは「私は命のパンである」という方と関わっているからだ、と述べられる。a'では逆に「私は生きているパンである」という方を食べるなら、「永遠に生きるだろう」と述べられる。

④bとb'では、「荒野で食べたマンナ」が、「天から降って来るパン」と対比される。モーセが与えたマンナを食べた者はいずれ死んだが、イエスがもたらすパンを食べる者は死ぬことがない。ここでの「パン」はまずはイエスが語る言葉を指すが、それだけではない。イエスが与えるパンはイエスの「肉」でもある。イエスが肉となってこの世に来たのは、肉を死に引き渡すことによって、この世に命を与えるためである。だからイエスは「命のパン」なのである。

⑦命への道を歩むために

④a人が生きるようにと心を砕く神の働きは、イエスを通して顕わにされるので、イエスのもとに行くことが、神の救いの業にあずかる唯一の道である。しかし、群衆はパンの奇跡にあずかってイエスのもとに集まったが、イエスが「天から降って来たパン」であると宣言したとき、それを受け入れることができずに、「ユダヤ人」へと変身し、イエスから遠ざかっていく。彼らは自分たちの思いから脱け出すことができずにつぶやき、命から遠ざかり、死への道を歩むことになる。

④bそれゆえイエスはユダヤ人に「つぶやくな」と命じ、「天から降って来たパン」を信じて、食べる者が「いのち」を得ると述べて信仰を求め。つぶやきをやめ、「引き寄せる」神の愛に応答し、イエスのもとに来た者は命のパンを受ける。このパンを食べる者は永遠に生きる。なぜなら、このパンは「世の命のため」にイエスが差し出した自らの肉であり、人を罪から贖った方の肉だからである。信じる者の生きる命は、このイエスが差し出した命なのである。

④c信仰には、引き寄せる神の愛と私たちの決断という二つの面がある。神の愛は私たちをイエスのもとへと引き寄せる。私たちはその愛に身を開き、その方のもとに行こうと決意する。イエスは父を見た唯一の方であり、私たちにその肉を与える方である。このイエスが神と私たちの出会いの場となる。「私たちは知っている」と言ってイエスを自分たちの知識の中に閉じこめることを止め、イエスの言葉を聞くことが命への第一歩となる。